

【1920年代のパリ】

サティ：ジュ トゥ ヴー

もともとはサティが1900年に作曲したアンリ・パコリ作詞によるシャンソン。現在はピアノ独奏版のほうがよく知られている。歌曲の中間部にトリオを加えた複合三部形式で、親しみやすいワルツとなっている。

《6人組のアルバム》より

フランス「6人組」と呼ばれるのは、20世紀初頭のパリで活躍した若き作曲家ミヨー、オネゲル、デュレ、オーリック、タイユフェール、プーランクの6人。特に共同で創作活動をしたわけでもなく、それぞれが目指す音楽の方向性も異なっていたが、雑誌記者アンリ・コレの書いた1920年1月16日付の記事「ロシアの5人、フランスの6人、そしてサティ」が発端となって、そう呼ばれるようになった。

《6人組のアルバム》はそんな彼らの数少ない共同作品集で、1920年に出版された。曲は作曲家の姓のアルファベット順に並べられており、本日はそのなかから4曲をお届けする。第1曲「前奏曲」は、のちに映画音楽の大家となったジョルジュ・オーリックによる。デュレを除く5人の合作によるバレエ音楽《エッフェル塔の花嫁花婿》の前奏曲をそのままピアノに移したもので、軍隊行進のモチーフを明るく描き出す。第2曲「無言歌」は、ルイ・デュレによる。曲集のなかでは一番長く、3分前後の曲となっている。第4曲「マズルカ」は、ピアニストや指揮者としても活躍したダリウス・ミヨーによる。メランコリーを基調として、後年の旺盛な作曲活動を予感させる。第6曲「パストラール」は、6人組の紅一点ジェルメーヌ・タイユフェールによる。変則的な5拍子による軽やかな牧歌。

オネゲル：ショパンの思い出

6人組の中心的存在だったとも言えるアルテュール・オネゲルは、スイス人の両親のもと、フランスで生まれ育った作曲家。ミヨーやタイユフェールとはパリ音楽院の同期である。本曲はレイモン・ベルナール監督の映画『友は今宵来る』（1946）の音楽として書かれた。

プーランク：《ナゼールの夜会》

6人組最後の一人、フランシス・プーランクのピアノ作品は小規模なものが多いが、本曲はそのなかでも規模・内容ともに充実している。プーランクの叔母が住んでいたフランス中部ナゼールで1930年に着手され、叔母の亡くなった翌年の1936年に完成した。前奏曲、8つの変奏、カデンツァ、終曲からなるが、

中心となる変奏曲は、一般的な主題にもとづいた変奏ではなく、それぞれが叔母のサロンを訪れる人物の「肖像画」となっている。

「前奏曲」は、夜会の幕開けのように力強く始まり、メロディックな旋律が華やかさを演出する。後半はエキゾチックな音階も混じる即興的なカデンツァ。次に短い8つの「変奏曲」が続く。明るい皮肉めいた「分別の極み」。ロマンチックな夜を感じさせる「手の上の心臓」。相反する態度を描き分ける「磊落と慎重と」。思索に沈む重い足取りを表現したような「思索の続き」。甘言の巧みさに思わず引き込まれる「口車の魅力」。軽快な自虐性すら感じる「自己満足」。訳知り顔で相手の不幸を眺めるような「不幸の味」。狡猾な老いの姿を思わせる「老いの警報」。そして宴の終わりを告げるように、高らかな「カデンツァ」へと移り、「終曲」では、息をつく間もなく表情を変えて立ち去る人々、人もまばらになり、そして最後に扉が閉められる。